

# 被災地派遣レポート〈第36回〉

主税局千代田都税事務所法人事業税課 藤原 典子さん

## ■ 宮城県へ

私は、4月9日から14日まで宮城県石巻市へ、6月20日から28日まで宮城県南三陸町へそれぞれ派遣されました。このレポートでは、主に宮城県石巻市への派遣期間中に従事した業務などについて報告いたします。

## ■ 業務内容

石巻市では、罹災証明書発行のための家屋被害調査の業務に従事しました。罹災証明書は義援金の支給等各種公的支援の申請に必要なため、早期に発行する必要がありました。また、被害の形跡は時間の経過により消滅し、被害程度の判断が困難となるため、早期に調査を終える必要がありました。

私たち東京都からの派遣職員は、石巻市職員を班長とする3名の班で、担当区域の家屋調査を行いました。

## ■ 派遣を通じて

派遣されている間、石巻市は気温が低く、風の強い日が続きました。このような中、終日歩き続け、一軒ずつ家屋を調査することは体力的につらい任務でした。しかし、震災の被害者でもある市職員は、衣食住もままならない状態であるにもかかわらず、石巻復興のため一丸となり任務に当たっていました。彼らの復興への熱い思いに触れ、私も自分を奮い立たせ任務を全うすることができました。

我々派遣隊が石巻を去るとき、市職員は「石巻は必ず復興しますから」と力強く語っていました。彼らの熱い思いをもってすれば、必ず復興すると信じることができました。

派遣期間中は、市内の施設をお借りし、大広間で、他の自治体からの派遣職員も含め男女約50人での共同生活を送りました。入浴できないことや、寝袋で寝ることはさほど辛くありませんでしたが、一人の時間が持てず常に周囲に気遣いしなければならないことで、かなり気疲れしました。しかし、被災された方は大きな悲しみを経験され、将来への不安も抱える中、さらにこのような不便な生活を余儀なくされているのだと思うと、ひどく胸が痛みました。

今回、私が派遣に参加した理由の一つに、被災地復興のために私に何ができるのかを考えたいという点がありました。しかし、被災地に赴き地元の方々と接することで、復興の主役は被災地の方々であると強く感じるに至りました。被災地の外にいる私に何ができるかを改めて考えていたとき、被災者である仙台の知人が、「東京が元気じゃないと、こっちも元気出ないから」と言ってくれました。その言葉を受けて、首都東京の役割の大きさを実感するとともに、自分の日々の業務が被災地の復興につながるのだと思いました。そし

て、私にできることは、東京都が元気になるために日々の業務に励むことだと分かりました。

今回の派遣により、地方公務員として地元を愛することの大切さ、東京都職員としての責任の重さを感じることができました。貴重な経験をさせていただいたことに、深く感謝しています。